

追悼

上田 学

(京都女子大学)

大田さんが亡くなって、数か月が経とうとしている。長きにわたって日英教育学会（日英教育フォーラム）の牽引役として精力的に献身されたことは誰もが知っている。フォーラムの準備から発足、そして本格的な活動を展開するなかで大田さんの果たした役割は極めて大きく、会員であれば彼女の存在を知らないものはいないはずである。

筆者は創設時からの代表であった鈴木慎一先生のあとを受けて2002年（平成14年）から代表を務めさせていただいており、ずいぶん長い間大田さんとは一緒に仕事をしてきた。旧知の間柄であることは当然であろう。しかし私がこの日英フォーラムが発足する前から、大田さんとながりがあったことを知っている人は少ない。しかも思いがけないところで接点があったのである。

それは大田さんの英国留学に関わっている。彼女は1985年秋から1988年春までリーズ大学で研究を進められていた。研究指導にあたられていたのは英国の教育行政史の大家ピーター・ゴスデン Peter Gosden 教授¹であった。

しかし筆者も同じような経験をもっている。1983年の夏から一年間、在外研修の機会をえたため、リーズ大学に赴いた。研究上の助言者はゴスデン教授であり、数多くの手助けを受けた。当初の計画とは異なり、日本とインドとの関係に着目したのはこの時期からであり、その間の経緯については『ある英国人のみた明治後期の日本の教育』（行路社、1993年）の「あとがき」に記したので、詳しくはそちらを参照していただきたい。

リーズ滞在中に、当時のインドが英領であったため資料の一部は英国に保管されていることを知り、ロンドンにたびたび出張して、主に British Library で関係資料の収集につとめていた。もう少し滞在が延長できれば、もっと資料集めができたはずと思いを抱きながら、帰国の途に就いた。以後は日本から直接インドを訪問し、資料集めをするようになったが、英国側の動向と比較しながらの作業であったため、1988（昭和63）年の12月に、インド（ボンベイとデリー）を訪問した後に英国に赴き、再度ロンドンの図書館を訪れることになった²。

日程的にやや余裕があったことから、一泊の予定でリーズを再訪することにした。その町にはことのほか懐かしさがあり、また親しい友人もいたことなどがその理由である。当然のことながら大学を訪問し、ゴスデン教授に近況報告をするため研究室を訪れた。大いに歓迎され、当時のことや、着手していた研究などについて話をし、楽しいひとときを過ごすことができた。その

折に、ふと教授の口から出てきたのが Do you know Naoko? という質問であった。私は Naoko? Who? と答えるより他はなかった。

聞けば日本から来た女性で、3年余リーズで研究をしていた人だとか。帰国したら連絡を取るようにとの要請を受けた。

1989年5月の終わりに東京に出張する機会があり、ゴスデン教授から教えてもらっていた番号をたよりに電話連絡をし、大田さんと初めて会うことになった。場所は、今でもはっきりと新宿駅東口近くの居酒屋ということ覚えてる。彼女もまた私の話を聞いたことがあると言っていたが、何といても私の方が Leeds の先輩であるということ双方確認し、話がはずんだことはいまでもない。

それからあとは、日英の準備に奔走されていき、またたびたび連絡するなかで、筆者もフォーラムに加わり、多くの方々と親しくさせていただくことになった。このようななりゆきの発端はリーズ大学であった。彼女のリーズでの暮らしや研究の進捗状況などいずれは詳しく聞き、私の経験などと対照させながら、今一度若き日々の思い出を大田さんと語ることができればよかったのに、という思いを捨て去ることができないのは甚だ残念である。

-
- 1 *The Development of Educational Administration in England and Wales*, Basil Blackwell, 1966, *The Evolution of a Profession*, Basil Blackwell, 1972, *The Education System since 1944*, Martin Robertson, 1983, *School of Education 1891-1991*, Leeds University Press, 1991. などの著書がある。
 - 2 これら一連の日印間の教育交流に研究に関する成果は、『近代日本の教育とインド』（多賀出版、2001年）として刊行されている。